兵庫教育大学　研究紀要　第46巻　2015年２月　pp.133－145

幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準から捉えた実習成果と課題（Ⅱ）
―第４年次の公私立幼稚園実習の場合―

Student Teachers' Outcome Using Attainment Benchmark for Practice Teaching Based on Teacher Standards for Kindergarten Teacher Training Program(Ⅱ): Case of Practice Teaching at Public and Private Kindergarten in Senior

別　惣　淳　二*　　名須川　知　子**　　横　川　和　章**
BESSO Junji　　NASUKAWA Tomoko　　YOKOGAWA Kazuaki
鈴　木　正　敏*　　長　澤　憲　保***
SUZUKI Masatoshi　　NAGASAWA Noriyasu

The purpose of this study is to clarify how much senior-year student teachers at Hyogo University of Teacher Education achieved attainment benchmark for practice teaching in teacher standards for kindergarten teacher training program through their experience in Practice Teaching IV (practice teaching in public and private kindergartens). We also analyzed how much those student teachers changed in their evaluation of the attainment benchmark, what they developed through Practice Teaching IV, and how they recognize their challenges before and after their teaching practice. Based upon our analysis of surveys for the senior-year students, the following results were revealed. Comparing pre- and post-survey of teaching practice, there are some items in the 'Competence of Understandings Young Children' that increased significantly, but there is no such item in other categories. As for their evaluation of attainment goals after the teaching practice, the student teachers evaluated themselves that 19 out of 45 items were in some way achieved. Especially, they rated items higher in the items of 'Basic Competence of Per forming in Teaching Profession.' Comparing evaluations on their achievement by student teachers and mentor teachers, only one item showed significant difference, but other items did not show any notable differences. Furthermore, the frequently rated categories as their developing areas were 'Competence of Designing and Planning', 'Comp etence of Effective Instruction and Support', ''Competence of Developing Curriculum Contents', and 'Competence of Understandings Young Children.' The categories rated as future improvement were 'Competence of Developing Curriculum Contents', 'Competence of Effective Instruction and Support', 'Competence of Assessment and Improvement', and 'Compete nce of Collaborating with Peers and the Community.' The categories that they hoped to attain prior to their teaching practice were 'Competence of Developing Curriculum Contents', 'Competence of Designing and Planning', and 'Competence of Understandings Young Children.'

キーワード：幼稚園教員養成スタンダード、実習到達規準、公私立幼稚園実習、実習成果
Key words：teacher standards for kindergarten teacher training program, attainment benchmark for practice teaching, practice teaching at public and private kindergarten, outcome of practice teaching

Ⅰ　研究の目的

教員養成においては教員として身につけさせる資質能力を巡って議論が活発化しており、教職課程で何を学生に教えるかという内容面以上に、その成果として学生が何を身につけることができたかという出口管理や出口保証への要請が高まっている。平成18年７月の中央教育審議会答申では、「大学の学部段階の教職課程が、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるものとなるためには、何よりも大学自身の教職課程の改善・充実に向けた取組が重要である」(1) と指摘し、教職課程の質的水準の向上を求めている。その方策として、教職実践演習の新設・必修化などが提言された。教職実践演習では、大学での学修や様々な活動を通して学生が身につけた教員としての資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されているか否かを「到達目標及び目標到達の確認指標例」に照らして確認することとなる。しかし、教職実践演習の「到達目標及び目標到達の確認指標例」では、小学校以上の学校段階の教員を中心に置いた資質能力が示されており、幼稚園教員に限定されたものではない。そのため、幼稚園教員養成を行う課程認定大学は、卒業時までにどのような資質能力を身に付けた教員を養成するのかを専門性基準（Professional Standards）として明確に示すことが求められる。

そうした卒業時までに幼稚園教員として必要な資質能力を学生に身に付けさせる上で、教育実習はまさに要で

＊兵庫教育大学教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース　＊＊兵庫教育大学人間発達教育専攻幼年教育コース
＊＊＊兵庫教育大学教育実践高度化専攻授業実践開発コース
平成26年10月30日受理

あり、養成カリキュラムでは理論と実践を架橋する重要な学びの機会として位置づけられてきた[2]。養成段階における教育の質保証を考えれば、教育実習が学生にとって有意義で、より充実した学びを保障するものでなければならない。ところが、幼稚園教員養成を行ってきた大学・学部の多くが、大学卒業時までに幼稚園教員としてどのような資質能力を身に付けさせるかを明確に示してこなかったために、教育実習の到達規準は曖昧なものとなり、それに伴って、以下のような教育実習の課題が生じていた。

第一に、教育実習における具体的な指導や評価は実習園への一任体制で実施されることが多く、実習生に何をどの程度身に付けさせるのかという到達規準が示されることがほとんどないため、指導内容の判断は実習園の実習指導教諭に委ねられ、実習生の成績評価も実習指導教諭の判断によって異なっていた[3]。このことによって、実習期間中に大学教員が実習生の実地指導や評価活動に関わろうとしても、実習指導教諭と大学教員とが実習の到達規準を共有していないために、両者が協働して実習生の指導に当たることを難しくさせてきた。

第二に、実習中の到達規準が不明確であったために、実習生もそれに照らして自己評価を行う機会が持てなかったことである。そのために、実習生が自身の体験を省察しながら成長しようとする自律的な自己教育力を身につけることに課題があった。

第三に、カリキュラム評価の観点から、各学年で開設されている教育実習科目において実習生にどのような資質能力を身に付けさせるのかという到達規準を明確にした上で、実習生の到達度を把握しなければ、教員養成教育の質保証を図ったり、教員として最小限必要な資質能力を確実に身に付けさせる教育実習カリキュラムに改善したりすることは不可能である。

そうした課題から、筆者らは学生が大学卒業時までに幼稚園教員として身につけるべき最小限必要な資質能力を明確にするために、全国の幼稚園教員ならびに幼稚園教員養成に携わる大学教員を対象に質問紙調査を行い、それを手がかりにして幼稚園教員養成スタンダードを開発した[4]。また、それに基づいて兵庫教育大学学部の幼稚園教員養成に係る4年間の教育実習科目（実地教育Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ）の実習到達規準を策定してきた[5]。その上で、兵庫教育大学が学部3年次に必修科目として設定している4週間の実地教育Ⅲ（附属幼稚園実習）を通して、実習生がどの程度成長し、実習到達規準に照らしてどの程度達成できているのか、また、到達規準を達成するためには事前にどのような資質能力を身につけておく必要があり、さらに実習後にはどのような資質能力を身につけていく必要があると考えているのかを実習生を対象に実施した質問紙調査から明らかにした[6]。

しかし、兵庫教育大学では、学部3年次の実地教育Ⅲにおいて4週間の附属幼稚園又は附属小学校での教育実習を済ませた後、さらに4年次後期に必修科目として2週間の実地教育Ⅳ（公私立幼稚園実習）の履修を課している。この実地教育Ⅳは、実地教育Ⅲを基本実習として履修する応用実習としての意味合いを有しており、「地域社会とそこにおける幼児又は児童の実態に応じた教育のあり方について指導を受け、地域社会及び幼児又は児童の実態に応じた教育を実践する。併せて、指導方法、指導技術を充実させるとともに、教師としての資質を高め、その責務を自覚する」ことを目的としているが、この実地教育Ⅳについては、実習到達規準から捉えた場合の実習生の成長や達成度と、実習前と実習後に実習生がどのような資質能力を身に付けておく必要があると考えているのかが明らかにされていない。それを明らかにすることは、この実地教育Ⅳの改善に向けての示唆を得るだけでなく、4年次の「教職実践演習」を実施する上で、当該教育実習科目の経験によって実習生の「最小限必要な資質能力」がどの程度身に付き、何が自己の課題であると認識したのかを把握するためのデータを得ることになると考えられる。

これまでの幼稚園教育実習の成果を質問紙調査から明らかにした先行研究を見ると、幼稚園教育実習の園評価と実習生の事後の自己評価との比較を通して、大学の事前事後指導における課題を明らかにしようとしている研究が多く見られる[7]。そうした研究では1週間の観察実習や3週間の本実習を対象としており、教育実習評価票を調査項目として用いている場合が多いため、学部卒業時の幼稚園教員養成スタンダードから策定した実習到達規準に基づいて実習生がどの程度資質能力を身につけることができたのかは明らかにされていない。また、高橋は、2年次の1週間の幼稚園実習と3年次の3週間の幼稚園実習の終了後に学生の学びについての自由記述を分析し、2年次の1週間の幼稚園実習では子ども一人一人にあった接し方をしていく際に保育者に根本的に必要な資質能力について学び、3年次の3週間の教育実習ではクラス担任として保育者に必要な資質能力を学んでいることを明らかにしている[8]。そして、太田は、短期大学2年次の3週間の幼稚園教育実習における実習成果と課題について事後に実習生と指導教諭に質問紙調査を実施し、その分析結果から、健康への留意や適切な身だしなみといった実習生としての基本的な態度については指導教諭、実習生双方で達成度が高いことを見出した。幼児との関わりについては、双方とも達成度が高いと評価していたが、指導教諭の方がその傾向がより強く現れていた。また、責任実習に関する内容については、双方とも達成度が低いものの実習生の方がより達成度が低かったが、仕事を最後までやり抜くこと、提出物の期限を守

ること、謙虚さや積極性については実習生よりも指導教諭の方が達成度が低かったことを明らかにしている[9]。さらに、高橋・大瀧・今村は、３年次生と短大１年次生を対象に実施している２週間の幼稚園教育実習終了後に質問紙調査を実施し、実習前の「教材研究」の習熟度によって実習中のピアノとその他の保育技術の満足度に差が生じたこと、実習前の「教材研究」の習熟度によって実習中の対保育者と対子どもに関する項目の達成度に差が生じたこと、実習前の「子どもの気持ちの読み取り」の習熟度によって実習中の対保育者と対子どもに関する項目の達成度に差が生じたことを明らかにしている[10]。しかし、これらの先行研究では、３週間等の本実習における実習成果と課題を明らかにしたものであって、３年次の４週間の本実習を踏まえて４年次に２週間の幼稚園教育実習を行っている大学は見当たらず、４年次の幼稚園教育実習の実習成果と課題を明らかにしている研究はない。

そこで、本研究では、幼稚園教員養成の質保証の観点から、幼稚園教員養成スタンダードに基づいて策定した実地教育Ⅳ（公私立幼稚園実習）の実習到達規準を用いて、実際に公私立幼稚園実習によって実習生の到達度評価がどの程度変化し、実習到達規準にどの程度到達できているのか、また、その実習を通して何が成長し、何が実習前と実習後の自己の学習課題であると実習生自身が認識しているのかを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ　研究の方法

１．調査対象

平成22年度において幼稚園実習を選択した実習生と実習指導教諭、それぞれ20名ずつを調査対象とした。

２．調査時期

調査時期については、20名の実習生に対して実習前の平成22年６月に「実地教育Ⅳ（幼稚園実習）の到達規準に関する事前調査」（質問紙調査）を、そして実習後の11月に「実地教育Ⅳ（幼稚園実習）の到達規準に関する事後調査」（質問紙調査）を実施した。

また、実習指導教諭に対しては、実習後の平成22年12月に「実地教育Ⅳの到達規準に関するアンケート調査」（質問紙調査）を実施した。

３．実習生に対する調査

実施手続きとしては、事前調査は大学での事前指導の際に学生に一斉配布し、その場で回答を求め、回収した。他方、事後調査については、大学での事後指導の際に学生に一斉配布し、その場で回答を求め、回収した。事前調査と事後調査に回答している実習生のデータ数は20であった。

質問紙調査の内容は、幼稚園教員養成スタンダードに示す「幼児理解力」「幼児への指導・援助力」「教職の基礎的遂行力」「保育内容の展開力」「保育評価・改善力」「職能向上力」「保護者・地域等との連携力」「保育計画力」の８領域51項目を用いて、実習生自身に実習前と実習後の到達度を5件法（１．全く身についていない、２．あまり身についていない、３．少し身についている、４．ほぼ身についている、５．十分身についている）で尋ねた。それに加えて、事後調査では、幼稚園教員養成スタンダードを用いて、「実習を通して自身が成長したと感じたこと」「今後の自己の学習課題であると感じたこと」「実習前に学んでおくべきだと感じたこと」について記述方式で回答を求めた。

４．実習指導教諭に対する調査

実施手続きとしては、園長を通じて公私立幼稚園の実習指導教諭に質問紙調査への回答を依頼し、回答後各自で返信用封筒を用いて個別に返送する形をとった。実習生のデータと対応している実習指導教諭のデータ数は15であった。

質問紙調査の内容は、幼稚園教員養成スタンダードの８領域51項目を用いて、指導された実習生の到達度を５件法（１．全く身についていない、２．あまり身についていない、３．少し身についている、４．ほぼ身についている、５．十分身についている）で尋ねた。

Ⅲ　研究の結果及び考察

１　実習前・後の実習到達度の変化

⑴　実習到達規準ごとにみた実習生の到達度評価の変容

公私立幼稚園実習を通して実習生が幼稚園教員養成スタンダードの51項目について実習前と実習後にどの程度到達できているかを自己評価させ、その結果を平均値で示したものが表１である[11]。

表１の実習前と実習後の平均値の差に注目すると、「１）幼児理解力」の「(3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる」の項目は、実習前よりも実習後の方が到達度評価が有意に高く、１％水準で有意差が認められた。逆に、「３）教職の基礎的遂行力」の「(34)心身共に良好な状態であるように自己管理ができる」の項目は、実習前よりも実習後の方が到達度評価が有意に低く、５％水準で有意差が認められた。また、実習到達規準には該当しない項目だが、「７）保護者・地域刀との連携力」の「(46)保護者との会話を大切にし、積極的に関わることができる」と「(43)保護者や地域の人々と手を携え、共に歩んでいこうとする」の項目についても、実習前よりも実習後の方が到達度評価が有意に低く、５％水準で有意差が認められた。

このことから、「(3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる」の項目に関しては、実習前と実習後で実習生の到達度評価に有意差が見られ、この実習の成果を表していると考えられる。しかしなが

表１　幼稚園教員養成スタンダードからみた公私立幼稚園実習における事前と事後の到達度（N=20）

	実習前		実習後		
	平均値(SD)	%	平均値(SD)	%	t検定
1）幼児理解力					
* (8)先入観を持たずに、幼児のありのままの姿を共感的・肯定的に受け止めることができる。	3.63(0.68)	60.0	3.89(0.74)	80.0	
* (1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる。	3.50(0.69)	60.0	3.75(0.55)	70.0	
* (3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる。	2.90(0.79)	20.0	3.35(0.67)	45.0	**
* (2)個々の幼児の人との関わり方や集団の中での育ちを捉えることができる。	3.00(0.80)	25.0	3.20(0.70)	35.0	
* (4)幼児の気になる行動や態度についての要因を自分なりに分析することができる。	3.15(0.81)	35.0	3.40(0.94)	55.0	
* (5)幼児期の発達の特性について理解している。	3.30(0.73)	45.0	3.45(0.61)	50.0	
* (6)幼児の身体の発育や病気について理解している。	2.60(0.68)	5.0	2.85(0.67)	15.0	
* (7)特別支援を必要とする幼児の特徴について理解している。	2.85(0.88)	15.0	2.95(0.83)	20.0	
2）幼児への指導・援助力					
** (12)目線を合わせて幼児に接し、心通わせながら関わることができる。	4.00(0.73)	75.0	4.05(0.89)	75.0	
** (10)幼児の状況の変化や多様な要求に対して、一人ひとりに丁寧な関わりができる。	3.55(0.61)	60.0	3.30(0.92)	30.0	
* (14)幼児の主体性や自立性の育ちを大切にした関わりができる。	3.45(0.89)	50.0	3.35(0.75)	40.0	
* (13)幼児が十分な満足感や達成感を感じられるように関わることができる。	3.21(0.86)	45.0	3.11(0.99)	35.0	
* (9)状況や課題等に応じて意思決定や行為選択ができる。	3.05(0.69)	25.0	3.15(0.81)	35.0	
* (11)幼児一人ひとりに配慮しながら、集団としてまとまりのある指導ができる。	2.95(0.83)	25.0	3.05(0.76)	25.0	
3）教職の基礎的遂行力					
** (38)他の人の意見に謙虚に耳を傾け、自ら学ぼうとする。	4.10(0.85)	90.0	4.05(0.95)	85.0	
** (34)心身共に良好な状態であるように自己管理ができる。	3.90(0.91)	65.0	3.65(0.81)	55.0	*
** (48)保護者や地域の人々に日常の挨拶がきちんとできる。	4.05(1.00)	80.0	4.05(0.95)	85.0	
** (35)社会人としての適切な礼儀、身だしなみ、言葉遣いができる。	3.65(0.99)	65.0	3.75(0.91)	65.0	
** (15)幼児に公平・公正な態度で関わることができる。	3.95(0.67)	85.0	4.00(0.80)	80.0	
** (39)一つのチームとして園の保育に取り組むことができる。	3.60(1.05)	55.0	3.55(1.00)	55.0	
** (37)常に明るく、積極的に物事に取り組んでいくことができる。	3.65(1.14)	60.0	3.70(0.98)	65.0	
** (33)保育者としての自覚と誇り、使命感を持っている。	3.60(0.88)	60.0	3.70(1.03)	65.0	
** (16)幼児に対して正しくわかりやすい言葉遣いができる。	3.55(0.76)	50.0	3.50(0.95)	60.0	
* (40)困難な事態に対しても問題解決に向けて粘り強く取り組むことができる。	3.85(0.88)	65.0	3.85(1.04)	75.0	
** (51)危機管理の意識を持っている。	3.55(0.89)	55.0	3.35(1.04)	40.0	
(50)事務的な仕事や園内整備等の仕事について理解している。	3.25(1.02)	10.0	3.15(0.99)	30.0	
4）保育内容の展開力					
** (18)絵本、歌、製作、運動遊び等に関する面白さを知っている。	3.90(1.12)	70.0	4.00(0.80)	80.0	
** (23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている。	3.40(1.00)	45.0	3.60(1.14)	65.0	
* (17)保育内容の知識に基づき、教材研究ができる。	3.30(0.92)	50.0	3.25(0.79)	45.0	
** (19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている。	2.95(0.89)	25.0	2.85(0.88)	25.0	
* (21)自然や自然物と関わり、保育に活用することができる。	3.15(0.81)	40.0	3.15(0.88)	30.0	
* (22)教材を再構成できる柔軟性がある。	2.55(0.89)	15.0	2.60(0.88)	15.0	
* (20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている。	2.85(0.99)	25.0	2.75(0.85)	15.0	
5）保育評価・改善力					
** (31)自らの保育を振り返り、反省・評価ができる。	3.80(0.77)	70.0	3.85(0.99)	70.0	
** (32)保育の評価を次の保育や指導計画の改善に生かすことができる。	3.45(0.95)	50.0	3.45(0.95)	40.0	
* (29)幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる。	2.65(0.81)	15.0	2.70(0.80)	15.0	
** (30)観察や記録の方法について理解している。	3.55(0.95)	55.0	3.55(0.89)	55.0	
6）職能向上力					
** (41)研修に積極的に参加して、保育者としての専門性を高めようとする。	3.55(1.00)	55.0	3.20(1.11)	35.0	
** (36)自然や社会の事象に興味や関心を持ち、自らの保育に取り入れようとする。	3.45(1.00)	45.0	3.55(1.00)	50.0	
* (42)社会参加活動等を通じて多様な人々との出会いや経験を深めようとする。	3.60(1.05)	55.0	3.50(0.95)	40.0	
(49)保護者や地域の人々との関わりから学び、それを自らの保育に生かそうとする。	3.40(0.94)	50.0	3.30(1.26)	50.0	

7）保護者・地域等との連携力					
* (47)保護者の話にしっかりと耳を傾け、聴くことができる。	3.95(0.83)	65.0	3.65(0.99)	65.0	
(46)保護者との会話を大切にし、積極的に関わることができる。	3.70(1.08)	60.0	3.25(1.07)	40.0	*
(43)保護者や地域の人々と手を携え、共に歩んでいこうとする。	3.60(1.00)	60.0	3.10(1.21)	30.0	*
(53)幼稚園と保育所や小学校との連携に関する知識を持っている。	2.95(0.89)	30.0	3.05(1.05)	30.0	
(44)幼稚園のある地域に関心を持ち、地域の特性を理解しようとする。	3.15(0.67)	30.0	3.20(1.06)	45.0	
8）保育計画力					
* (26)ねらい、内容、環境構成、保育者の援助等、整合性のとれた1日の指導計画を立てることができる。	2.90(0.85)	25.0	3.15(0.88)	30.0	
* (27)幼児の実態と興味や関心を捉え、幼児の活動を予測した指導計画を立てることができる。	3.00(0.86)	30.0	3.10(0.91)	30.0	
** (28)季節の変化や行事の内容を考慮して、指導計画を立てることができる。	3.15(0.81)	35.0	3.30(0.92)	45.0	
* (25)教育課程や長期、短期の指導計画の関連性について理解している。	3.10(0.97)	35.0	3.15(0.99)	40.0	
** (52)幼稚園教育要領の内容を理解している。	3.35(0.99)	45.0	3.20(1.06)	40.0	

（註１）項目番号の前の「*」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が3.50以上4.00未満で、「４」と「５」の回答率が50.0％以上であったことを意味する。項目番号の前の「**」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が4.00以上で、「４」と「５」の回答率が80.0％以上であったことを意味する。
（註２）実習前と実習後の平均値は、５件法（１．全く身についていない、２．あまり身についていない、３．少し身についている、４．ほぼ身についている、５．十分身についている）の回答を数値とみなして算出したものである。％は「４．ほぼ身についている」と「５．十分身についている」に回答した割合を示す。
（註３）t 検定は、実習前と実習後の平均値について検定した結果を示すものであり、***:p<.001、**:p<.01、*:p<.05を意味する。

表２　８領域からみた公私立幼稚園実習における事前と事後の到達度（N=20）

	実習前	実習後	
	平均値(SD)	平均値(SD)	t検定
1）幼児理解力	3.11(0.61)	3.36(0.53)	**
2）幼児への指導・援助力	3.37(0.61)	3.33(0.71)	
3）教職の基礎的遂行力	3.73(0.75)	3.69(0.78)	
4）保育内容の展開力	3.16(0.78)	3.17(0.71)	
5）保育評価・改善力	3.36(0.77)	3.39(0.76)	
6）職能向上力	3.50(0.88)	3.39(0.95)	
7）保護者・地域等との連携力	3.47(0.73)	3.25(0.96)	
8）保育計画力	3.10(0.73)	3.18(0.81)	

（註）t 検定は、実習前と実習後の平均値について検定した結果であり、***:p<.001、**:p<.01、*:p<.05を意味する。

ら、それ以外の項目については、実習前よりも実習後の方が到達度評価が有意に低かったり、実習前と実習後の平均値に有意差が認められなかったりするなど、この実習の成果は見られなかった。

⑵　８領域からみた実習生の到達度評価の変容

さらに、実習生の到達度評価の変容をスタンダードの８領域の観点から把握するために、領域ごとに構成項目の合成得点（平均値）を算出し、その結果を示したものが表２である。

実習前と実習後の平均値との間に有意差が認められた領域は、「幼児理解力」であり、１％水準で有意差が見られた。したがって、幼稚園教員養成スタンダードの観点から見ても、公私立幼稚園実習の経験は、「幼児理解力」を形成する上で有効であることを示している。

しかし、有意差が認められなかった他の７つの領域については、２週間の公私立幼稚園実習の経験では実習生に実習前よりも「身についている」と実感させたり、認識させたりすることが難しいことを示していると考えられる。

２　実習生の実習後の到達度評価

また、実習生が実地教育Ⅳ（公私立幼稚園実習）の実習到達規準についてどの程度到達できているのかを把握するために、表１の「実習後」の到達度評価の平均値に注目したい。ここでは、スタンダードの８領域51項目それぞれについて平均値を算出し、平均値が3.50以上で、なおかつ「５．十分身についている」と「４．ほぼ身についている」に回答している者が50％以上であれば、「ある程度身についている」項目であると判断できると考えた[12]。また、平均値が4.00以上で、なおかつ「５．十分身についている」と「４．ほぼ身についている」に回答している者が80％以上であれば、「かなり身についている」項目であると判断できると考えた。

まず、「１）幼児理解力」の領域においては、「(8)先入観を持たずに、幼児のありのままの姿を共感的・肯定的に受け止めることができる」と「(1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる」の項目が3.50以上の平均値を示し、ある程度身に付けていると感じている実習生が多かった。しかし、それ以外の６項目は3.50以下の平均値を示し、特に「(6)幼児の身体の発育や病気について理解している」と「(7)特別支援を必要とする幼児の特徴について理解している」は3.00以下の平均値を示すなど、ある程度身についている

と自己評価できる状態に達していない実習生が多かった。

「２）幼児への指導・援助力」の領域については、「(12)目線を合わせて幼児に接し、心通わせながら関わることができる」の項目が3.50以上の平均値を示し、ある程度身についていると感じている実習生が多かったが、それ以外の５項目では3.50以下の平均値を示していることから、ある程度身についていると自己評価できる状態に達していない実習生が多かった。

「３）教職の基礎的遂行力」の領域については、「(51)危機管理の意識を持っている」の項目のみ3.50以下の平均値を示したが、それ以外の項目は3.50以上の平均値を示し、ある程度身についていると感じている実習生が多かった。そのなかでも、「(38)他の人の意見に謙虚に耳を傾け、自ら学ぼうとする」、「(48)保護者や地域の人々に日常の挨拶がきちんとできる」、「(15)幼児に公平・公正な態度で関わることができる」の３項目は4.00以上の平均値を示し、かなり身についていると感じている実習生が多かった。

「４）保育内容の展開力」の領域では、「(18)絵本、歌、製作、運動遊びなどに関する面白さを知っている」の項目が4.00以上の平均値を示し、かなり身についていると感じている実習生が多かった。また、「(23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている」の項目については3.50以上の平均値を示し、ある程度身についていると感じている実習生が多かった。それ以外の項目は3.50以下の平均値を示し、とりわけ「(19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている」、「(22)教材を再構成できる柔軟性がある」、「(20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている」の３項目は3.00以下の平均値を示すなど、ある程度身についていると自己評価できる状態に達していない実習生が多かった。

「５）保育評価・改善力」の領域では、「(31)自らの保育を振り返り、反省・評価ができる」と「(30)観察や記録の方法について理解している」の項目は、3.50以上の平均値を示し、ある程度身についていると感じている実習生が多かった。しかし、「(32)保育の評価を次の保育や指導計画の改善に生かすことができる」の項目は3.50以下の平均値を示し、「(29)幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる」の項目は3.00以下の平均値を示すなど、ある程度身についていると自己評価できる状態に達していない実習生が多かった。

「６）職能向上力」の領域では、「(36)自然や社会の事象に興味や関心を持ち、自らの保育に取り入れようとする」の項目が3.50以上の平均値を示し、ある程度身についていると感じている実習生が多かった。しかし、その他の３項目については3.50以下の平均値を示し、ある程度身についていると自己評価できる状態に達していない実習生が多かった。

「７）保護者・地域等との連携力」の領域では、「(47)保護者の話にしっかりと耳を傾け、聴くことができる」の項目が3.50以上の平均値を示し、ある程度身についていると感じている実習生が多かった

「８）保育計画力」の領域については、いずれの項目も3.50以下の平均値を示し、ある程度身についていると自己評価できる状態に達していない実習生が多かった。

以上の結果から分かることは、公私立幼稚園実習において設定した45項目の実習到達規準のうち、実習生の到達度評価が3.50以上の平均値を示した項目は19項目であり、４割強の項目が高い自己評価を得ていることである。そのうち、平均値が4.00以上で「４．」「５．」に回答した割合が80％以上に該当する項目は4項目であった。

領域的に捉えると、「３）教職の基礎的遂行力」の領域が相対的に自己評価が高いといえる。逆に相対的に自己評価が低かった領域は、「４）保育内容の展開力」と「８）保育計画力」であり、改善・検討を要する課題として浮き彫りになった。

したがって、実習生の実習後の到達度評価では、実習到達規準として示された資質能力について、ある程度身についていると自己評価している項目が４割強存在し、３年次の附属幼稚園実習の時に１／３程度しか高い自己評価が得られなかったことと比べれば[13]、より多くの項目で高い自己評価が得られるようになったといえるが、総体的には、ある程度身についていると自己評価できる状態に達していない項目の方が多いことが読み取れる。

３　実習後における実習生と実習指導教諭の到達度評価

公立幼稚園実習において実習生を指導した実習指導教諭は、実習を通じて実習生が教員養成スタンダードに示された実習到達規準の資質能力をどの程度身につけることができたと思うかを把握するために、実習生の到達度評価と同様に平均値で示したものが表３である。

表３の結果によれば、実習指導教諭による各実習生の到達度評価では、45項目の実習到達規準のうち20項目について3.50以上の平均値を示し、ある程度身についているという評価を得た。そのうち、「３）教職の基礎的遂行力」の「(38)他の人の意見に謙虚に耳を傾け、自ら学ぼうとする」「(48)保護者や地域の人々に日々の挨拶がきちんとできる」「(35)社会人として適切な礼儀、身だしなみ、言葉遣いができる」「(15)幼児に公平・公正な態度で関わることができる」と「５）保育評価・改善力」の「(31)自らの保育を振り返り、反省・評価ができる」「(30)観察や記録の方法について理解している」の６項目は4.00以上の平均値を示し、かなり身についているという評価を得た。

また、実習生と実習指導教諭の到達度評価を比較する

表３　幼稚園教員養成スタンダードからみた公私立幼稚園実習の実習生と実習指導教諭の到達度評価

	実習生			実習指導教諭			
	平均値(SD)	%	N	平均値(SD)	%	N	t検定
1）幼児理解力							
* (8)先入観を持たずに、幼児のありのままの姿を共感的・肯定的に受け止めることができる。	3.87(0.74)	80.0	15	3.80(0.68)	66.6	15	
* (1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる。	3.80(0.41)	80.0	15	3.33(0.62)	40.0	15	*
* (3)幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる。	3.40(0.63)	46.7	15	3.27(0.59)	33.3	15	
* (2)個々の幼児の人との関わり方や集団の中での育ちを捉えることができる。	3.33(0.62)	40.0	15	3.27(0.46)	26.7	15	
* (4)幼児の気になる行動や態度についての要因を自分なりに分析することができる。	3.67(0.72)	66.7	15	3.60(0.74)	60.0	15	
* (5)幼児期の発達の特性について理解している。	3.53(0.52)	53.5	15	3.40(0.51)	40.0	15	
* (6)幼児の身体の発育や病気について理解している。	2.92(0.64)	15.4	13	3.00(0.58)	15.4	13	
* (7)特別支援を必要とする幼児の特徴について理解している。	2.85(0.80)	7.7	13	3.00(0.58)	15.4	13	
2）幼児への指導・援助力							
** (12)目線を合わせて幼児に接し、心通わせながら関わることができる。	4.07(0.88)	80.0	15	3.93(0.88)	73.4	15	
** (10)幼児の状況の変化や多様な要求に対して、一人ひとりに丁寧な関わりができる。	3.33(1.05)	33.3	15	3.47(0.83)	40.0	15	
* (14)幼児の主体性や自立性の育ちを大切にした関わりができる。	3.53(0.64)	46.7	15	3.13(0.52)	20.0	15	
* (13)幼児が十分な満足感や達成感を感じられるように関わることができる。	3.33(0.82)	40.0	15	2.93(0.59)	13.3	15	
* (9)状況や課題等に応じて意思決定や行為選択ができる。	3.20(0.68)	33.3	15	3.13(0.74)	33.3	15	
* (11)幼児一人ひとりに配慮しながら、集団としてまとまりのある指導ができる。	3.20(0.56)	26.7	15	3.07(0.70)	26.7	15	
3）教職の基礎的遂行力							
** (38)他の人の意見に謙虚に耳を傾け、自ら学ぼうとする。	4.13(0.64)	86.7	15	4.13(0.74)	80.0	15	
** (34)心身共に良好な状態であるように自己管理ができる。	3.73(0.80)	53.3	15	4.07(0.96)	73.3	15	
** (48)保護者や地域の人々に日常の挨拶がきちんとできる。	4.20(0.68)	86.6	15	4.27(0.70)	86.7	15	
** (35)社会人としての適切な礼儀、身だしなみ、言葉遣いができる。	3.87(0.83)	73.3	15	4.40(0.63)	93.4	15	
** (15)幼児に公平・公正な態度で関わることができる。	4.00(0.85)	80.0	15	4.20(0.56)	93.4	15	
** (39)一つのチームとして園の保育に取り組むことができる。	3.67(0.82)	60.0	15	3.47(0.52)	46.7	15	
** (37)常に明るく、積極的に物事に取り組んでいくことができる。	3.87(0.83)	73.3	15	4.00(0.85)	66.6	15	
** (33)保育者としての自覚と誇り、使命感を持っている。	3.87(0.83)	73.3	15	3.87(0.74)	66.7	15	
** (16)幼児に対して正しくわかりやすい言葉遣いができる。	3.53(0.99)	60.0	15	3.53(0.74)	53.4	15	
* (40)困難な事態に対しても問題解決に向けて粘り強く取り組むことができる。	4.00(0.88)	78.6	14	3.64(0.63)	57.1	14	
** (51)危機管理の意識を持っている。	3.40(0.83)	33.3	15	3.27(0.80)	33.4	15	
(50)事務的な仕事や園内整備等の仕事について理解している。	3.00(0.85)	26.7	15	3.20(0.94)	46.7	15	
4）保育内容の展開力							
** (18)絵本、歌、製作、運動遊び等に関する面白さを知っている。	4.07(0.80)	86.7	15	3.80(0.68)	66.6	15	
** (23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている。	3.67(1.18)	73.3	15	3.60(0.83)	53.3	15	
* (17)保育内容の知識に基づき、教材研究ができる。	3.20(0.78)	40.0	15	3.33(0.62)	40.0	15	
** (19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている。	2.93(0.88)	26.7	15	3.20(0.68)	33.3	15	
* (21)自然や自然物と関わり、保育に活用することができる。	3.27(0.59)	33.3	15	3.20(0.68)	33.3	15	
* (22)教材を再構成できる柔軟性がある。	2.60(0.83)	13.3	15	2.80(0.68)	13.3	15	
* (20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている。	2.87(0.74)	13.3	15	2.93(0.59)	13.3	15	
5）保育評価・改善力							
** (31)自らの保育を振り返り、反省・評価ができる。	3.93(0.80)	66.7	15	4.00(0.66)	80.0	15	
** (32)保育の評価を次の保育や指導計画の改善に生かすことができる。	3.67(0.82)	46.7	15	3.87(0.64)	73.3	15	
* (29)幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる。	2.80(0.68)	13.3	15	3.20(0.68)	33.3	15	
** (30)観察や記録の方法について理解している。	3.47(0.99)	46.6	15	4.07(0.70)	80.0	15	
6）職能向上力							
** (41)研修に積極的に参加して、保育者としての専門性を高めようとす	3.17(0.84)	25.0	12	3.42(0.90)	50.0	12	
** (36)自然や社会の事象に興味や関心を持ち、自らの保育に取り入れようとする。	3.71(0.91)	57.1	14	3.79(0.70)	64.3	14	
* (42)社会参加活動等を通じて多様な人々との出会いや経験を深めようとする。	3.58(0.90)	33.3	12	3.50(0.91)	58.3	12	
(49)保護者や地域の人々との関わりから学び、それを自らの保育に生かそうとする。	3.36(1.21)	45.5	11	3.09(0.70)	27.3	11	

7）保護者・地域等との連携力							
*	(47)保護者の話にしっかりと耳を傾け、聴くことができる。	3.55(1.04)	63.6	11	3.18(0.98)	36.4	11
	(46)保護者との会話を大切にし、積極的に関わることができる。	3.18(0.98)	27.3	11	2.82(0.75)	18.2	11
	(43)保護者や地域の人々と手を携え、共に歩んでいこうとする。	3.18(1.08)	36.4	11	2.64(0.67)	9.1	11
	(53)幼稚園と保育所や小学校との連携に関する知識を持っている。	3.08(0.99)	16.7	12	3.00(0.85)	25.0	12
	(44)幼稚園のある地域に関心を持ち、地域の特性を理解しようとする。	3.15(0.99)	46.2	13	3.08(0.76)	30.8	13
8）保育計画力							
*	(26)ねらい、内容、環境構成、保育者の援助等、整合性のとれた1日の指導計画を立てることができる。	3.27(0.59)	33.3	15	3.53(0.74)	53.4	15
*	(27)幼児の実態と興味や関心を捉え、幼児の活動を予測した指導計画を立てることができる。	3.20(0.68)	33.3	15	3.27(0.70)	40.0	15
**	(28)季節の変化や行事の内容を考慮して、指導計画を立てることができる。	3.33(0.72)	46.7	15	3.40(0.83)	46.7	15
*	(25)教育課程や長期、短期の指導計画の関連性について理解している。	3.13(0.74)	33.3	15	3.13(0.74)	33.3	15
**	(52)幼稚園教育要領の内容を理解している。	3.13(0.92)	33.4	15	3.40(0.83)	46.7	15

（註１）項目番号の前の「*」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が3.50以上4.00未満で、「４」と「５」の回答率が50.0％以上であったことを意味する。項目番号の前の「**」は、実習指導教諭が回答した実習到達規準としての適合度の平均値が4.00以上で、「４」と「５」の回答率が80.0％以上であったことを意味する。
（註２）実習生と実習指導教諭の平均値は、５件法（１．全く身についていない、２．あまり身についていない、３．少し身についている、４．ほぼ身についている、５．十分身についている）を数値とみなして算出したものである。％は「４．ほぼ身についている」と「５．十分身についている」に回答した割合を示す。
（註３）t 検定は、実習前と実習後の平均値について検定した結果を示すものであり、***:p<.001、**:p<.01、*:p<.05を意味する。

と、「(1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる」の項目に５％水準で有意差が認められたが、それ以外の項目では有意差は認められなかった。先行研究では実習生の自己評価と実習指導教諭による評価との間には多くの差異が見られるが[14]、本実習の実習生は第３年次に附属幼稚園又は附属小学校での４週間の教育実習を経験していることもあり、実習指導教諭の評価とほぼ同様の評価ができており、客観的に自己評価ができる力が身についてきているものと考えられる。

4　記述回答からみた公私立幼稚園実習の成果と課題

上述の数量的分析に加えて、さらに公私立幼稚園実習の成果と課題を析出し、そこから導き出される大学カリキュラムの課題を検討することを目指して、３つの問いを設定し、記述形式で回答を求めた。

⑴　実習生の成長内容

最初に「実地教育Ⅳを通して自分が教員になるために一歩成長したなと思うことは何ですか」という問いに対して、実習生に幼稚園教員養成スタンダードの51項目の中から該当する項目番号を選び（複数回答可）、選んだ理由を記述してもらった。その回答件数は表４の「成長したと思うこと」に示した。

実習生が成長したと思うことで比較的回答が多かった項目は、「(12)目線に合わせて幼児に接し、心通わせながら関わることができる」（４人）、「(27)幼児の実態と興味や関心を捉え、幼児の活動を予測した指導計画を立てることができる」（３人）、「(1)幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる」（２人）、「(14)幼児の主体性や自立性の育ちを大切にした関わりができる」（２人）、「(18)絵本、歌、製作、運動遊び等に関する面白さを知っている」（２人）、「(21)自然や自然物と関わり、保育に活用することができる」（２人）、「(26)ねらい、内容、環境構成、保育者の援助等、整合性のとれた１日の指導計画を立てることができる」（２人）であった。

また、成長したと思うことの回答を領域ごとに集計してみると、平均回答数の多い上位３位までの領域は、「８）保育計画力」、「２）幼児への指導・援助力」、「４）保育内容の展開力」、「１）幼児理解力」であった。

「８）保育計画力」に関しては、「保育者の目線で保育を考えて、子どもたちにやらせるのではなく、幼児と向き合って幼児の実態から保育を考えられた」や「ねらいの意味がよく分かっていなかったが、教師のねらいの持ち方によって幼児への関わり方や伝え方が変わってくることを知った」という記述にみるように、実習生は、保育計画を組み立てる上で、幼児の実態の把握や教師自身のねらいがどのような意味を持っているのかが理解できるようになったという理由から成長を感じていた。

「２）幼児への指導・援助力」については、「とにかく、子どもの話を聞こうとする姿勢を持ち続け、今の子どもの様子を先入観を持たずに、受け止めようとすることができた」や「指導教諭の意見などを踏まえて、子どもの視線に立ち、より興味を引くことができる導入を考えられた」という記述に見るように、実習生は幼児と同じ目線で接し、幼児の様子を受け止めようとしたことや幼児の視線に立って自発的に興味をもてるような環境を工夫できたという理由から成長を感じていた。

「４）保育内容の展開力」では、「初めは緊張してしまい、言葉もしどろもどろだったり、ピアノも間違ったりしていたが、回数をこなすことで落ち着いて周りや子どもを見て、冷静に対応できるようになっていった」や「今まで経験した遊びはもちろん、自分が知らなかった遊びも積極的に取り入れて、保育者自身も楽しめて遊ぶ

ことができた」という記述に見られるように、回数を重ねることで保育場面で幼児を見ながらピアノを弾くことができるようになったり、いろいろな遊びを保育に取り入れて幼児と一緒に楽しむことができたという理由から成長を感じていた。

「１）幼児理解力」に関しては、「言葉で言わない子どもたちであっても、子どもの様子や態度、表情などから、子どもたちの思っていることに気づき、声をかけにいくことができた」や「寄り添って保育することで、幼児の気持ちになって考えられるようになった」という記述に見られるように、実習生は、幼児の様々な行動を観察し、そこから内面を理解することによって幼児と関われるようになったり、絶えず幼児と一緒に活動する中で幼児の気持ちや、興味・関心などが考えられるようになったという理由から成長を感じていた。

上記の記述回答から、この実習では、幼児観察や幼児と活動を共にすることによって幼児理解力を身に付け、それを基礎にしながら幼児への指導・援助の場面に応用したり、部分実習や一日経営実習の指導計画を作成する際に生かしたりすることによって、それらに必要な能力を高めていた。また、保育内容については幼児の実態や季節などを考慮に入れて保育に様々な活動や遊びなどを積極的に取り入れ、実際の保育場面では失敗を繰り返しながら子どもの前でピアノを弾く能力を身につけていた。このように、実習生は、この実習を通して、保育に直接関係する実践的な能力について自己の成長を感じているが、その成果は、先の実習生の実習前・後における到達度評価に大きな変化を与えるまでに至らず、「幼児理解力」のみに変化が生じたと考えられる。

⑵　実習生の今後の学習課題

次に、実習生の今後の学習課題について検討したい。「実地教育Ⅳを経験して、これから自分が教員になるために、学んだり、身につけたりしなければならないと思った自己の学習課題は何ですか」という問いに対して、実習生に幼稚園教員養成スタンダードの51項目の中から該当する項目番号を選び（複数回答可）、選んだ理由を記述してもらった。その回答件数は表４の「今後の課題と感じたこと」に示した。

今後の学習課題として比較的回答が多かった項目は、「(19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊び等の技術を持っている」（９人）、「(29)幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる」（４人）、「(10)幼児の状況の変化や多様な要求に対して、一人ひとりに丁寧な関わりができる」（３人）、「(20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている」（３人）であった。

今後の学習課題として回答された件数を領域毎に集計してみると、平均回答数の高かった上位３位は、「４）保育内容の展開力」、「２）幼児への指導・援助力」、「５）保育評価・改善力」、「７）保護者・地域等との連携力」であった。

「４）保育内容の展開力」に関しては、実習指導教諭から保育を任させたときに、保育内容に関する知識や技術などのレパートリーが少なすぎて対応に困ったことを記述している実習生が多い。ある実習生は、帰りの準備の時間に「いきなり手遊びが思いつかなかった。また、エプロンシアターやパネルシアターをやったことがないので保育の引き出しが少ないと思う」と記述していたり、別の実習生は、保育の場面で「急にピアノを弾いてと先生に言われ、弾けなかったので、ピアノの技術をもっと高める」必要があると記している。その他にも、一日経営実習を考える際に、「今までの保育や子どもの様子から、どんな環境や保育内容をすべきか考えるときに、ネタが少なすぎて、ねらいとしたいことと内容が合っていなかったかもと思った」や、保育中に「時間が余ってしまったり、教材が難しかったときに、保育内容も変えたりすることができず、もっと引き出しを増やしておけばよかった」と述懐している記述も存在した。

「２）幼児への指導・援助力」については、幼児の状況の変化や多様な要求に対して、幼児一人ひとりへの丁寧な関わりができなかったという実習生の記述が見られた。ある実習生は、複数の幼児に周りを囲まれ、「一度に幼児全員が話しかけてきた時など、全てに対応できずに、全員になあなあな返答しかできなかった」と記していた。また、保育において、幼児一人ひとりに配慮しながら、集団としてまとまりのある指導ができなかったという記述もある。たとえば、一日経営実習をしていた時に「自分が担任として子どもの前に立ってみると、全体を見るだけでいっぱいいっぱいになってしまった」という実習生がいた。

「５）保育評価・改善力」においては、「(29)幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる」の項目のみに回答が集中した。その理由としては、責任実習で「指導案通りに進めようとしすぎて、活動に何か予想外のことが起こった時、うまく修正できず、困った」という記述や、一日経営実習を行った時、「自分がやろうとしていたことが、幼児たちの発言により、異なる活動になってしまった」という記述が挙げられる。

「７）保護者・地域等との連携力」に関しては、実習中は直接保護者や地域の人々と関わることはなくても、幼稚園の現場では保護者や地域の人々との連携が重要であり、将来現場に出た際に必要になると感じた実習生の記述が見られた。たとえば、送迎時など保護者が園にいる時、「子どもたちは幼稚園や保育所だけでなく、家庭で育っているため、保護者と一緒に育てていくことが大切だと感じたから」や「実習生なので、保護者支援は大

表４　公私立幼稚園実習の成果と課題に関する記述回答数

領域	項目番号	成長したと思うこと			今後の課題と感じたこと			事前に学ぶべきと感じたこと		
		件数	合計	平均回答数	件数	合計	平均回答数	件数	合計	平均回答数
1）幼児理解力	(8)	1	6	0.75		1	0.13		1	0.13
	(1)	2								
	(3)	1								
	(2)	1			1					
	(4)									
	(5)	1								
	(6)							1		
	(7)									
2）幼児への指導・援助力	(12)	4	6	1.00		6	1.00		0	0.00
	(10)				3					
	(14)	2			1					
	(13)									
	(9)									
	(11)				2					
3）教職の基礎的遂行力	(38)		3	0.25		1	0.08		0	0.00
	(34)									
	(48)									
	(35)	1								
	(15)									
	(39)									
	(37)									
	(33)									
	(16)				1					
	(40)	1								
	(51)	1								
	(50)									
4）保育内容の展開力	(18)	2	7	1.00		17	2.43		24	3.43
	(23)	1						4		
	(17)				2			2		
	(19)	1			9			10		
	(21)	2			1			1		
	(22)				2			2		
	(20)	1			3			5		
5）保育評価・改善力	(31)		1	0.25		4	1.00		0	0.00
	(32)									
	(29)				4					
	(30)	1								
6）職能向上力	(41)		0	0.00		0	0.00		0	0.00
	(36)									
	(42)									
	(49)									
7）保護者・地域等との連携力	(47)		1	0.20	1	3	0.60		0	0.00
	(46)				2					
	(43)									
	(53)									
	(44)	1								
8）保育計画力	(26)	2	6	1.20		2	0.40		1	0.20
	(27)	3			1			1		
	(28)	1								
	(25)									
	(52)				1					

（註１）集計結果は、実習生 N=20のデータに基づいている。
（註２）平均回答数は、各スタンダード領域の合計件数を当該項目数で割った数値である。

切だがなかなか関わることがなく現場に出ることになるため」とその必要性を述べていた。

このように、今後の学習課題としては、実習中に実習生がうまく実践できなかったことや、実習中はできなかったが将来現場に出れば必要になることが中心に挙げられていた。

⑶　実習生の事前の学習課題

さらに、実習生の事前の学習課題について検討していきたい。ここでは、「実地教育Ⅳを経験する前に、自分は何を学んだり、身につけたりしておくべきだったと思

いましたか」という問いに対して、実習生に幼稚園教員養成スタンダードの51項目の中から該当する項目番号を選び（複数選択可）、選んだ理由を記述してもらった。その回答件数は、表４の「事前に学ぶべきと感じたこと」に示した。

事前の学習課題として比較的回答が多かった項目は、「(19)ピアノ、手遊び、パネルシアター、運動遊びなどの技術を持っている」(10人)、「(20)音楽遊び、造形遊び、運動遊び等の指導方法を知っている」（５人)、「(23)保育内容に活用できる得意な分野を持っている」（４人）であった。

また、事前の学習課題として回答された件数を領域ごとに集計すると、平均回答数が多かった上位３位の領域は、「４）保育内容の展開力」、「８）保育計画力」、「１）幼児理解力」であった。

「４）保育内容の展開力」の領域は、事前の学習課題の回答件数が最も多かった。その理由としては、まず、実習生が一日経営実習や部分実習などの設定保育時に「子どもが騒いでいる時にうまくひきつけることができなかった」と振り返っており、保育内容に活用できる得意な分野を身につけておくべきであったと述べている。また、多くの実習生は、保育場面を通して「保育を行うにあたって、教材や手遊びなどのレパートリーが全然ないので、もっと身につけておかなければならないと感じた」ことを挙げており、保育内容の技術や指導方法を身につけておくべきであったと述懐している。また、別の実習生は、保育活動中に「幼児の年齢にあった保育が設定できていなかったため、幼児たちにとって難しい活動になってしまった時があった」と述べており、事前の教材研究不足を指摘している。このように、「保育内容の展開力」の記述回答が多かったことは、実習生の実習後の到達度評価において「保育内容の展開力」の自己評価が相対的に低かったことや、先の「今後の学習課題」において「保育内容の展開力」の平均回答数が最も高かったこととも符合している。しかしながら、この結果は、第３年次の附属幼稚園実習においても同様の結果が得られており[15]、多くの実習生は「保育内容の展開力」に係る諸能力を実習前までに身につけなければならないという必要性を自覚しながらも、現実的には実習前までに身につけることが難しく、そのままの状態で実習を迎えたものと推察される。

「８）保育計画力」に関しては、保育計画を立てる際に「幼児の活動を予測しきれていなかった」ことから、実習生はあらかじめ幼児の実態と興味や関心を捉え、幼児の活動を予測した指導計画を立てることのできる能力が必要であったと感じていた。

「１）幼児理解力」に関しては、実習中に幼児がけがをしたり、嘔吐をしたりした時に「応急処置の方法や、どうして吐いてしまったのか、少しでも予想できればあまり慌てずに済んだのではと思う」と記しており、そうした実習経験から、実習生は「幼児の身体の発育や病気について」の専門的知識を事前に学んでおくことが必要であると感じたようである。

Ⅳ　結論と今後の課題

本研究では、幼稚園教員養成の質保証の観点から、幼稚園教員養成スタンダードに基づいて策定した実地教育Ⅳ（公私立幼稚園実習）の実習到達規準を用いて、実際に第４年次の実地教育Ⅳによって実習生の到達度評価がどの程度変化し、実習到達規準にどの程度到達できているのか、また、その実習を通して何が成長し、何が実習前と実習後の自己の学習課題であると実習生自身が認識しているのかを明らかにしようとした。その結果、以下の点が明らかになった。

実習前・後での実習到達度の変容については、「幼児理解力」の「幼児の様々な行動から、心情や意欲等の内面を理解することができる」の項目のみが有意に高まっていた。領域ごとに見ると、「幼児理解力」が有意に高まっていたが、それ以外の領域については有意な変容は見られなかった。

実習生の実習後の到達度評価では、45項目の実習到達規準のうち3.50以上の平均値を得た項目は19項目であり、そのうち４項目は4.00以上の平均値を示した。つまり、45項目の実習到達規準のうち４割強の項目で、ある程度身についていると自己評価していたが、半数以上の項目はある程度身についていると自己評価できる状態に達していなかった。領域で捉えると、相対的に自己評価が高かった領域は、「教職の基礎的遂行力」であり、逆に相対的に自己評価が低かった領域は「保育内容の展開力」と「保育計画力」であった。

実習指導教諭による実習生の到達度評価については、45項目の実習到達規準のうち3.50以上の平均値を得た項目は20項目であり、そのうち６項目は4.00以上の平均値であった。また、実習生と実習指導教諭の到達度評価を比較すると、「幼児の遊びの姿から、一人ひとりの興味や関心を捉えることができる」の項目のみに有意差が認められたが、それ以外の項目では両者間に評価の差はなかった。

公私立幼稚園実習による実習生の成長内容に関して分析した結果、最も回答数が多かった領域は「保育計画力」であり、次いで「幼児への指導・援助力」や「保育内容の展開力」の領域の回答数が多かった。３つめに回答が多かったのは「幼児理解力」の領域であった。実習生の成長に関する記述では保育に直接関係する諸能力の回答が多かったが、実習前・後における到達度評価の変容の結果と符合したのは「幼児理解力」のみであった。

また、実習生の今後の学習課題に関して分析した結果、最も回答数が多かった領域は、「保育内容の展開力」であり、次いで、「幼児への指導・援助力」や、「幼児の姿や発想を大切にし、臨機応変に計画を修正することができる」を指す「保育評価・改善力」の回答数が多かった。さらに、３つめは、将来現場に出た際に必要になるため「保護者・地域等との連携力」についての回答が多かった。これらの課題内容は、実習生の「実習後」の到達度評価において3.50以下の平均値であった項目と符合していた。

さらに、実習生の事前に学んだり、身につけておくべき課題について分析した結果、「保育内容の展開力」が最も回答が多かった。その他に、幼児の身体の発育や病気についての理解を指す「幼児理解力」や、幼児の実態と興味・関心を捉えて、幼児の活動を予測した指導計画を立てることを指す「保育計画力」について回答があった。

上記の結論から、２週間の公私立幼稚園実習を通して、実習生の実習到達度が高まったのは「幼児理解力」の項目のみであり、その他の実習到達規準の項目については成果が見られなかった。これは、２週間という実習では実習生に資質能力を身につけさせるにも十分な指導ができないという実習期間の問題が関係していることも考えられる。実習後の到達度評価をより一層高めるという意味において、実習期間の確保を含めてこの実習科目の検討・改善を行っていく必要がある。また、そのこととも関係するが、実習生の実習後の到達度評価において実習到達規準として示された資質能力のうち、「教職の基礎的遂行力」を含めて19項目がある程度身についていると自己評価していたが、半数以上の項目はある程度身についていると自己評価できる状態に達していないため、そうした項目の資質能力がある程度身についていると自己評価できる状態に達するように改善することが、この実習の課題である。

さらに、実習前の学習課題として実習生のニーズが高かった「保育内容の展開力」「幼児理解力」「保育計画力」の内容については、事前に大学の授業科目で学ばせるとともに、実習前の事前指導の際に、実習でのそれらの能力の必要性を説明した上で、実習が始まるまでに身につけておくことを促す必要がある。

研究課題としては、2008年度入学生より兵庫教育大学の学部カリキュラムが新カリキュラムになり、公私立幼稚園実習も２単位から３単位へと増単されたことから、実習が３単位になったことによってどのような実習成果が得られるのかを、幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準を用いて再度明らかにする必要があると考えている。

註

⑴　中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（答申）、2006年。

⑵　教員養成における教育実習の意義の一つは「就職する以前に教師として自己の職務を遂行し得る最低限の教育実践に関する経験を得ること」であり、もう一つの意義は「大学で学んだ知識や技能を具体的に検証することであり、特に教育科学における理論と実践の結合、教育の実践的、技術的性格を研究する場とする」ことである（教師養成研究会編『教育実習の研究』学芸図書、1992年、６頁）。

⑶　国立大学協会教員養成制度特別委員会『大学における教員養成―教員養成の現状と将来―』、1992年、33-34頁。

⑷　本研究で用いた幼稚園教員養成スタンダードは2008年度科学研究費補助金をもとに研究開発された８領域51項目からなるものであり、その内容は2011年の論文（別惣淳二・名須川知子・横川和章・長澤憲保・鈴木正敏・佐藤哲也・石野秀明・上西一郎・飯塚恭一郎・岸本美保子「大学卒業時に求められる幼稚園教員の実践的資質能力の明確化―幼稚園教員養成スタンダードの開発」、日本教育大学協会年報編集委員会編『日本教育大学協会研究年報』第29集、2011年、161-174頁）に掲載されている。その後、兵庫教育大学では、この幼稚園教員養成スタンダードを元にして「教員養成スタンダード（幼稚園版）」（別惣淳二・渡邊隆信編『教員養成スタンダードに基づく教員の質保証』ジアース教育新社、2012年、62-84頁を参照されたい）が開発されている。

⑸　別惣淳二・名須川知子・横川和章・長澤憲保・鈴木正敏・石野秀明「幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準の明確化―４年間の幼稚園教育実習科目における到達規準の体系化を目指して―」、日本教育大学協会年報編集委員会編『日本教育大学協会研究年報』第30集、2012年、107-118頁。

⑹　別惣淳二・名須川知子・横川和章・鈴木正敏・長澤憲保・田中亨胤・飯塚恭一郎「幼稚園教員養成スタンダードに基づく実習到達規準から捉えた実習成果と課題（Ⅰ）―第３年次の附属幼稚園実習の場合―」『兵庫教育大学研究紀要』第43巻、2013年、149-162頁。

⑺　大塚建樹「幼稚園教育実習評価と自己評価の比較―本学幼児教育科学生の場合―」『盛岡大学短期大学部紀要』第10巻、2000年、27-32頁。加藤渡・烏田直哉「幼稚園教育実習における実習指導園評価と自己評価との比較」『一宮女子短期大学紀要』第46集、2007年、155-164頁。名倉一美・三輪千明・茂井万里絵「幼稚園教育実習の指導のあり方について―実習園の評価と学生の自己評価との比較から―」『浜松学院大学研究

論集』第7号、2011年、149-164頁。
⑻　高橋真由美「幼稚園教育実習における学生の学びに関する一考察（２）―幼稚園実習Ⅰと幼稚園実習Ⅱの学びの比較から―」『藤女子大学紀要』第46号第Ⅱ部、2009年、113-118頁。
⑼　太田裕子「２年次幼稚園実習の学習成果と課題に対する実習生と指導教諭の捉え方」『羽陽学園短期大学紀要』第９巻第４号、2014年、381-390頁。
⑽　高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美「幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について―「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から―」、『東京家政大学研究紀要』第51集(1)、2011年、7-13頁。
⑾　表１の実習到達規準については、前掲書、別惣・名須川・横側・長澤・鈴木・石野、2012年の研究による。表３の実習到達規準についても同様である。
⑿　平均値が3.50以上という基準は、１サンプルのｔ検定において3.00を検定値にとった場合に、５％水準で有意であったことも理由の一つである。
⒀　前掲書、別惣・名須川・横川・鈴木・長澤・田中・飯塚、2013年、152頁。
⒁　前掲書、大塚、2000年。加藤・烏田、2007年。名倉・三輪・茂井、2011年。太田、2014年。
⒂　前掲書、別惣・名須川・横川・鈴木・長澤・田中・飯塚、2013年、158-160頁。

付記

本研究は、文部科学省所管独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）（一般）、平成20～22年度、研究代表者：別惣淳二、課題番号20530729「幼稚園教員養成スタンダーズに基づく実習評価規準の開発とその活用に関する研究」）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。